

はじめに

本書のポイント

- ① 会計をはじめて学ぶ人向けに書かれています。
- ② 会計について、その人なりのイメージを持ってもらうことをねらいとしています。
- ③ 会計のなかでもわかりやすく、印象深いトピックを中心に説明しています。
- ④ おもしろくない話を無理におもしろくするために、間違いを言ったり、大風呂敷を広げるような説明はしていません。中身は、むしろオーソドックスです。

本書の動機

この「はじめに」を読んでいるということは、すでに本書を購入済みか、もしくは、会計について学ぶことを決意していて、それで適当な本を探しているのだと推察します。したがって、会計に縁のなかった人の関心を惹くために、会計の役立ち、重要性をここで力説する必要はないものと考えます。

そのうえで、率直に言いますと、会計はダルいです。これは会計を大学で十数年教えてきて得た結論です。ちょっとおもしろいことに、日本語の「怠（ダル）い」と英語の“dull”（ダル）には、「のろい、鈍い、飽き飽きする」といった共通の意味があります。

「会計がダルいって？ そんなことはないはずだ。現に、おもしろくて大ヒットした会計の本だってあるじゃないか？」という疑問を持つ人もいます。その疑問に答えているのが、友岡賛

[2007]『なぜ「会計」本が売れているのか？——「会計」本の正しい読み方』（税務経理協会）です。そこでの結論は、おもしろいと思われる会計の本の多くは、実は「会計」ではなくて、「経営」について書かれているのではないかと、いうものです。

実際には、会計について書かれた本にも、血湧き肉躍るような作品はあります（たとえば、福井義高 [2008]『会計測定の再評価』中央経済社）。しかし、そういった本も、会計や会計に関連する事項について、下地ができていないとおもしろく読めません。やはり、会計をはじめて学ぼうとする人にしてみれば、会計はダルいようです。

では、なぜ会計はダルいのか？ たぶん、覚えなければいけないこと（教員サイドからだとなえなければならないこと）が延々と続くせいだと思います。まず、貸借対照表の資産をやって、負債をやって、そして資本、それで貸借対照表が終わったら、次は損益計算書に行き、まずは収益、それから費用、ここで当期純利益が出てきて、損益計算書は終わり、そうしたら今度は株主資本等変動計算書……と、まるでエンドレスな感じです。それでも、左の耳で聞いた話と右の耳で聞いた話とが、脳の真ん中で合体して、とんでもない結末を迎えるといった展開があれば、おもしろく聞ける（話せる）と思います。でも、たいていは、まるで山頂が見えないまま富士山に登っているようで、授業の途中でも「あと、あれと、あれと、あれについて話さなければならないのか」とため息が出てしまいます。教えているほうがこうだったら、聞かされているほうはもっと大変でしょう。

基礎的な知識をとにかく頭にいれなければならないのだから、どんな教科だって最初のうちはダルい。そうなのかもしれませんが、ダルいのを辛抱して、忍耐強く会計の授業を聞いた学生は最終的に血湧き肉躍るような感動に至ったのでしょうか？ 思うに、「大学で

会計の授業はとったけど、そして、試験前是一所懸命勉強したけれど、もう何も残ってないや」という卒業生が多いのではないのでしょうか？ これではあまりにも労力と時間の無駄です。

最低限、なんでもいいから「会計ってこういうものだ」というイメージを持って、卒業してもらいたい。細かいことは全部忘れてしまっていたとしても、あるいは、最初から知らなかったとしても、会計について自分なりのイメージさえあれば、社会に出てから会計の話題に触れることがあったときに、そのイメージを手がかりにして、「これはこういうことなんじゃないか」となんとなく見当をつけることができるでしょう。ある程度見当がつけば、正確な知識は後から自分で調べたり、あるいは会計の専門家に質問をしたりすることもできる。こう考えて、はじめて会計を学ぶ学生が会計のダルさに負けないように工夫を凝らして書かれたのが本書です。

各章の構成

各章は、イントロ、ハイライト、ベーシック、アドバンス、サマリー、トランジット、というパートから構成されています。そのほか、本文に組み入れにくい補足説明や、興味深いけれども章立てしにくかったトピックを「Column」として独立させています。また巻末には、「演習問題」と、付録として2013年度の「日産自動車株式会社の決算書（一部）」を載せています。

▶「イントロ」は、落語でいう枕に相当します。一般的な教科書では、章のはじめに、その章で扱う内容の要約が紹介されていることが多いと思います。ですが、何の知識もないところに、いきなり要約を言われてもピンと来ないだろうとも考えられます。そこで、内容には直接触れないまま、くだけた感じで各章のねらいを示しました。

- ▶「ハイライト」では、各章で扱われるトピックのなかで、最もとっつきやすく、印象深いものを1つ取り上げて解説しています。このパートを、ベーシック以降に進むための足掛かりにしてください。また、このパートには、ほかのことは忘れてしまっても、これだけは印象に残してもらいたいという願いが込められています。予備知識がなくても理解できるように書かれていますので、ハイライトだけなら、第1章から順番に読む必要はありません。
- ▶「ベーシック」は、一般的な入門書の本文に該当します。ハイライトとあわせて読めば、会計の初歩について学んだことになります。このパートは、第1章から順番に読まれるという前提で書かれています。
- ▶「アドバンス」は、一部の章に設けられています。ここには、初心者には少し理解が難しいかもしれない、会計の技法や理屈が取り上げられています。わからなければわからないままでも差し支えないようなところで悩んでしまい、先に進めなくなってしまうことのないように、ベーシックから切り離しました。ですから、後回しにしたり、飛ばしたりしてもかまいません。
- ▶「サマリー」は各章のトピックを短文の箇条書きにまとめたものです。そこに書いてあることが理解できたと思ったら、「□」にチェックを入れましょう。
- ▶「トランジット」は、一般的な教科書の参考文献に該当しますが、本書ではより重要な役割を担っています。というのも、本書はわかりにくい話や細かい話は避けることを基本方針としています。中途半端に説明しても、理解されないし、印象にも残らないというのなら、最初から話をするのはやめようというわけです。しかし、わかりにくい、あるいは、覚えるのが面倒な話が

ら逃げてばかりいて、それでも会計をちゃんと学んだことになるのかと言えば、なかなかそうもいきません。そこで、堅苦しい部分は、詳しい教科書、もしくは、専門書で、学んでもらうことにしました。ようするに、このパートは、いわば虫食い状態の本書の、穴を埋めるための参考図書を示した、乗継案内です。

本書の利用法：たとえば……

本書は、初歩的な会計のおいしいところばかりを抽出したものですから、たとえば、新聞の経済欄を読んだり、会計の専門家と話が通じるようになるために、会計のことを知っておいたほうがいいといった人に最適です。つまり、教養書として読まれるのにぴったります。これは有斐閣アルマ・シリーズの赤（Interest）の趣旨でもあります。

しかしながら、専門書として読まれるためのタネもまかれていきます。実は本書は、読者が行き着く最終形態として会計学者を想定しています。取り上げるトピックの選定にあたっては、通常は会計の初歩と考えられていないことであっても、会計学者に成長するうえで、有用な栄養となるものを積極的に取り入れました。また、そのトピックを学んだとしても、この先使い道がないな、という話は取り上げないようにしています。それから、会計を専門科目として体系的に学べるようにトランジットで案内をしています。もっとも、トランジットに出ている文献を、その都度、入手しなくてはならないのだとしたら、勉強がなかなか進まないではないかと思う読者もいるでしょう。そこで、有斐閣アルマの緑（Basic）には、桜井久勝・須田一幸 [2015] 『財務会計・入門——企業活動を描き出す会計情報とその活用法（第10版）』があります。この本を傍らに置いて、

本書のトランジットが案内している内容に対応する箇所を確認しながら、読み進めていくのがいいと思います。

たとえば、資格の取得をめざしている人は、本書で受験勉強をするだけでは、まったく不十分です。出題をする側にしてみれば、ごく基本的なことや、誰にでも簡単に理解し、覚えられるようなことで問題をつくるのは難しいのです。受験者ほぼ全員が正解してしまうのでは試験になりませんから。そのため、実務に携わる人間以外にしてみれば、これを覚えていて、何になるの？ といった、ダルイことが出題されるわけです。資格試験に的を絞った受験参考書が多く出ていますので、それを活用するのがよいでしょう。

たとえば、本書を授業の教科書に利用しようとする教員は、とくに現行の会計基準について具体的な説明が乏しいという印象を持つと思います。近時、会計基準は頻繁に改定され、内容も細くなってきていますので、いったん現行の基準について言及しはじめると、大雑把な解説では、かえって不適切な記述になってしまうかもしれません。そのため、本書では法令や基準の規定を取り上げるとは極力避けています。授業の場でタイムリーな解説を聞くほうがむしろ学生のためになると思います。そのほか、一般の教科書には載っているのに、話がややこしいという理由で、本書では取り上げていないトピックも多くありますが、これも授業で直接説明を聞いたほうが学生は理解しやすいと思います。

なお、「演習問題」は各章ごとではなく、巻末にまとめて載せています。なぜそうしたかという点、各章ごとに、本文をコピーすれば答えになってしまうような問題を載せても、後に残らないと考えたからです。できれば、本書を一通り読んだ後で、他の章とも関連づけながら解答を考えてもらいたいと思います。なお、解答例は以下で示した有斐閣書籍編集第2部のウェブサイト公開します。

このサイトには、随時、演習問題とその解答例を追加していく予定です。

有斐閣書籍編集第2部ブログ内、本書のサポートページ

<http://yuhikaku-nibu.txt-nifty.com/blog/2015/07/post-e090.html>
(付加データ はじめて出会う会計学 新版)で検索)

新版化にあたって

新版では、本書の基本方針は変えずに、近年の会計基準や国際的な動向にあわせて記述をアップデートしました。本文の各所で取り上げている事例も、可能な限り新しいものに変更しています（古い事例でも、とくに有益なものについては、そのまま記載しています）。第9章「決算書の分析」については、中心的に扱う事例を小売業界の企業に変更して全面的に改訂し、業界内での企業の比較や時系列による分析を、詳しく解説する形で新たに執筆しました。

また、初版では第12章としていた「費用配分のバリエーション」を、全体の説明の流れや位置づけを再検討して、第7章へ移動することにしました。第6章までの各章で、利益の認識や収支の期間配分、資産・負債の評価について基本的な考え方を説明したうえで、第7章では費用配分のバリエーションについて応用的な内容を取り上げています。

各章に掲載している **Column** についても、新たに、「包括利益」、「原価計算と管理会計(2)」（損益分岐点分析とCVP分析）、「キャッシュフロー計算書」をそれぞれ追加しました。

さらに、初版では「ヒストリー」として一部の章の末尾に掲載していた、会計制度の歴史に関する解説は、第13章として独立させ、株式会社の成立と利益概念の変化、収支の期間配分と減価償却、資産評価基準の変遷について、本書のそれまでの解説との関連も示しながら紹介する形に改訂しました。



著者紹介

川本 淳 (かわもと・じゅん)

1965 年生まれ (双子座, O 型)

東京大学大学院経済学研究科博士課程修了

元学習院大学経済学部教授 (2014 年逝去)

主著:『連結会計基準論』森山書店, 2002 年。「ひとつの決算, ふたつの監査」『会計人コース』2008 年 3 月号, など。

読者へのメッセージ:「最終目標は学界からダメ出しされずに, 100 万部売ることです」と言ったら, (有斐閣ではない) ある編集者に鼻で笑われました。1 人でも多くの方に, この本から会計の勉強を始めていただき, 彼を見返すのが私の悲願です。自分で言うのもなんですが, わりとお薦めだと思います。

野口 昌良 (のぐち・まさよし)

1967 年生まれ

ウェールズ大学カーディフ校 Ph. D. (カーディフ・ビジネススクール)

現職: 首都大学東京都市教養学部経営学系教授

主著: “Accounting Principles, Internal Conflict and the State: The Case of the ICAEW,” (共著), *Abacus*, 40 (3), 2004. “Harmonising Intergroup Relations within a Professional Body: the Case of the ICAEW,” (共著), *The British Accounting Review*, 40 (2), 2008, など。

読者へのメッセージ: 会計は組織の経済行動を映し出す鏡の役割を果たすと同時に, その活動の特定の側面を積極的に可視化する眼鏡の役割も果たしています。会計のこうした機能を可能なかぎり精緻に分析することを心がけています。

勝尾 裕子 (かつお・ゆうこ)

1972 年生まれ

東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得

現職: 学習院大学経済学部教授

主著: “Fair Value Accounting and Regulatory Capital Requirements,” (共著), *Economic Policy Review*, 4 (3), 1998. “The IASB and ASBJ Conceptual Frameworks: Same Objective, Different Financial Performance Con-

cepts,” (共著), *Accounting Horizons*, 29 (1), 2015, など。

読者へのメッセージ：1人でも多くの方に、会計のおもしろさや奥深さを感じていただければとてもうれしく思います。

山田 純平 (やまだ・じゅんぺい)

1974年生まれ (牡牛座, B型)
東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得

現職：明治学院大学経済学部教授

主著：『資本会計の基礎概念』中央経済社, 2012年。「オリンパス事件の会計問題」『経済研究』(明治学院大学)第146号, 2013年, など。

読者へのメッセージ：この本では、会計の基本的な考え方を示すとともに、現実の世界で会計のどのような部分が問題とされているか明らかにすることを目標としました。本書を通じて、自分の身の周りで生じている会計問題を分析する観点を養っていただけたらと思います。



(2009年撮影)

荒田 映子 (あらた・えいこ)

1977年生まれ (山羊座, O型)
東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得
現職：武蔵大学経済学部教授

主著：「リース会計基準の変更が法人企業統計に与える影響」(共著)『経済学論集』(東京大学)第78巻3号, 2012年。「会計基準変更の経済的帰結——ファイナンスリースのオンバランス化と負債コスト」大日方隆編著『会計基準研究の原点』中央経済社, 2012年, など。

読者へのメッセージ：私が会計学に興味をもったのは、ゼミで出会った先生方、先輩方に会計のおもしろさを教えていただいたからでした。これから大学で会計を学ぼうとしている学生さんにとって、この本が会計「学」の魅力を知らるきっかけとなれたらと思います。



目 次

はじめに	i
著者紹介	viii

第1章 会計の目的 1

イントロ	1
ハイライト 決算書は成績表：学生と教員の対話	2
ベーシック	5
1 会計の中心は企業の成績を表す決算書	5
2 決算書がつくられる目的	7
3 法律による決算書の利用	8
4 会計の目的に関する代表的な理論	9
サマリー	11
トランジット	11

第2章 会計基準と会計制度 17

イントロ	17
ハイライト ビジネスに会計は不可欠だけど	18
ベーシック	22
1 金融商品取引法の会計制度	23
2 会社法の会計制度	25
3 税法の会計制度	29

4 会計基準の形成過程	31
サマリー	36
トランジット	36

第3章	収支の期間配分	39
-----	---------	----

イントロ	39
ハイライト 個人タクシーの成績表	40
ベーシック	44
1 費用と資産との配分	44
2 有価証券のケース	48
アドバンス 期間配分の具体例	51
サマリー	55
トランジット	56

第4章	利益の認識と測定	57
-----	----------	----

イントロ	57
ハイライト 積切出帆基準と航海完了基準	58
ベーシック	62
1 会計で捉えられる企業の成績	62
2 投資と回収	63
3 製造業におけるお金の流れ	63
4 利益を記録するタイミング	65
5 回収・投資と利益を記録するタイミングのズレ	69
アドバンス	70
1 複雑な投資回収プロセス	70

2 例外的な収益認識基準	74
サマリー	76
トランジット	76

第5章	複式簿記	79
-----	-------------	-----------

イントロ	79
ハイライト 複式簿記は貸借一致が大原則	80
ベーシック 手続きの一巡	87
1 仕訳による記録	88
2 転記	90
3 勘定の締め切りと残高試算表	91
4 決算整理仕訳と経過勘定	93
5 残高試算表から損益計算書, 貸借対照表を作成	96
サマリー	99
トランジット	99

第6章	資産・負債の認識・測定	107
-----	--------------------	------------

イントロ	107
ハイライト 資産・負債の評価と範囲	108
開業費の資産計上 (108) 資産の範囲について (109) 資	
産の評価について (110) 負債について (110)	
ベーシック	111
1 資産と負債の定義	111
2 資産の評価	114
事業投資と金融投資 (115)	

アドバンス 取得原価と実現	119
サマリー	121
トランジット	122

第7章 費用配分のバリエーション 131

イントロ	131
ハイライト 先入先出法と後入先出法	131
ベーシック	135
1 商品の会計	135
売上高と売上原価の計上 (135) 売上原価と繰越商品 (135)	
費用と資産との連動 (136) 低価法 (137)	
2 減価償却	140
基本的な考え方 (140) 減価償却の方法：定額法、定率法、生	
産高比例法 (141) 減価償却費の計算 (144) トラックを	
途中で売却 (145) 減損会計 (147)	
3 引当金	149
製品保証引当金 (149) 引当金を設定する理由 (151) ポ	
イント引当金 (152) リストラ引当金と減損会計 (152)	
退職給付引当金 (153) 貸倒引当金 (154) 引当金が利益	
の計算に及ぼす効果 (154)	
サマリー	156
トランジット	156

第8章 資 本 会 計 159

イントロ	159
ハイライト 自分の会社の株式を売っても利益にはならない理	
由：気やすい学生との対話	160

ベーシック	163
1 出資は利益とは無関係	163
株主が1人のケース(163)	株主が複数のケース(164)
2 配当も利益とは無関係	165
配当のケース(165)	自社株買いのケース(166)
3 自社株の売却も利益とは無関係	167
自社株を売却するケース(167)	
アドバンス 新株予約権の会計	168
1 新株予約権って何?	168
2 新株予約権の会計処理	169
新株予約権に関する2つの考え方(170)	
3 資本と利益の区別	171
サマリー	173
トランジット	173

第9章 決算書の分析 179

イントロ	179
ハイライト 2つの会社を比較する：無愛想な教員との会話	
	180
ベーシック	185
1 決算書による分析の前提	185
損益計算書の利益は1つではない(186)	時系列分析とクロスセクション分析(188)
2 比率分析	191
効率よく儲けているのはどちら?：収益性分析(1)	(192)
効率よく儲けているのはどちら?：収益性分析(2)	(195)
利益率の分析	(197)

効率性の分析（198）	倒産しにくいのはどちら？：安全性分析（200）
3 株価を用いた分析	204
4 企業当てクイズ	205
5 決算書の比較による分析の問題点	208
サマリー	211
トランジット	212

第10章	会 計 単 位	223
-------------	----------------	------------

イントロ	223
ハイライト エンロンが用いた SPE：学生と教員との対話	225
ベーシック	229
1 連結決算書	229
●複数の会社から構成される企業集団を単位とする決算書	
基本的な考え方（229）	連結決算書の範囲（231）
2 セグメント情報	237
●連結した会計データの分割	
セグメント情報の必要性（237）	セグメンテーション（238）
共通費の配分（239）	
アドバンス 連結決算書を作成する手続き	240
1 投資と資本の相殺消去	241
2 の れ ん	242
3 非支配株主持分	243
4 親子会社間の仕入・販売取引	245
サマリー	247
トランジット	247

第11章 会計情報の役立ち 251

イントロ	251
ハイライト 株価と無関係な最高益	252
ベーシック	254
1 株式市場に注目する研究	254
2 経営者の判断に注目する研究	259
サマリー	265
トランジット	265

第12章 監査と粉飾 269

イントロ	269
ハイライト	270
1 大手監査法人への業務停止命令	270
2 カネボウの粉飾決算	271
3 粉飾決算に対する会計士の関与	273
4 中央青山監査法人の消滅と企業・証券市場に与えた影響	275
ベーシック	277
1 財務諸表監査の必要性	277
2 粉飾決算の意味	279
3 財務諸表監査の概要	280
4 内部統制	283
サマリー	286
トランジット	286

1 はじめに	293
2 株式会社制度の成立	294
●原始商法および改正商法	
3 減価償却費の計算構造	297
4 商法の時価評価規定との調整	303
5 おわりに	307
おわりに	309
演習問題	314
付録 日産自動車株式会社の決算書（一部）	319
索引	324

本文イラスト 有留ハルカ

Column 一覧

- ① 株式会社と証券市場（13）
- ② 会計は羊羹？（54）
- ③ 包括利益（101）
- ④ 原価計算と管理会計（1）（123）
- ⑤ 原価計算と管理会計（2）（174）
- ⑥ キャッシュフロー計算書（217）
- ⑦ 純粋持株会社と連結決算書（233）
- ⑧ 企業の価値（262）
- ⑨ エージェンシー理論（284）
- ⑩ 環境会計（288）

第1章

会計の目的

イントロ



「会計とは結局何なのか」とか、「会計はどう役に立つのか」とか、そうしたアウトラインがわからないまま、詳しい説明をされても困るかもしれません。でも、具体的な説明がないまま、お題目だけ挙げられても全然ピンとこないかもしれません。実際のところは、個別具体的な中身を勉強していくなかで、自分なりに会計の全体像が見えてくるといった感じになると思います。だからといって、「全体像はやがて見えてくるから、とにかく目の前に書かれている用語、手続き、理屈を忍耐強く覚えなさい」と言われても、なかなか勉強に身が入らないでしょう。

そこで、まずは「会計とは何か」について、とっかかりのイメージを得てもらいたいと思います。そのために、「決算書は企業の成績表である」という、会計に対する1つの見方を紹介します。この見方は、典型的で、かつ、わかりやすい話ですが、「会計の定義」といった厳密な議論からはほど遠いものです。その後の学習を通じて、読者のみなさんが自分なりに、補足、修正、批判の対象とすべき叩き台として示すことにします。

学生「会計ってビジネスで役に立つと思うので、今度、授業を取ろうと思うのですが」

教員「どう役に立つと思っているのかな？」

学生「それがあまりピンとこないのです。会計をしない企業はないと思うので、重要なのは間違いないはずなんですが」

教員「会計が何の役に立っているのかは、会計学者が好んで議論するテーマではあるけど、僕らの哲学論争を聞かされても実感がわかないだろうから、大雑把な話をするね」

教員：「まず、会計といっても、いろいろな種類がある。それらを全部ひっくるめて説明するのは難しい。難しいのは困るから、ここでは企業の決算書に注目しよう。つまり、会計というのは企業の決算書をつくることだと考えてほしい」

教員：「もっとも、決算書はどういうものかについて説明するのもなかなか大変だ。なので、その中身はゆっくり時間をかけて勉強してほしい。その代わり、とりあえずは『決算書は企業の成績表』と覚えてもらいたい。それだけで、決算書の役立ちについて、いろいろわかってくるはずだよ」

学生：「いきなり企業の成績表と言われても、ちっともわかった気がしないのですが」

教員：「そうだな。では、学校の成績表について考えてみよう。こちらはおなじみでしょう。ちょっと聞くけど、学校の成績表ってなぜ必要？ どんな役に立っている？」

学生：「それは……。成績表がなければ、どの教科ができて、どの教科ができないかがわからないじゃないですか」

教員：「それがわかってどうなるのかな？」

学生：「出来が悪い教科はがんばって勉強するとか、あるいは得意な教科が生かせる進路を選ぶとか、判断できます」

教員：「いいねえ。企業の成績表もそういうふうに使える。たとえば成績の悪い事業については何らかの策を講じるとか、あるいは成績の良い事業についてはさらに発展させるとか、つまり経営方針を立てるときの資料になるってことだね。それから？」

学生：「うちでは親に見せなければならぬことになっています」

教員：「なぜ？」

学生：「学費を払っているのは親だから、だそうです」

教員：「そうそう。企業も株主には決算書を見せなければいけないんだよ。お金を出している人には、成績がどうなっているか報告する義務があるってことだね。そのために、成績表や決算書が必要というわけだ」

学生：「成績が悪いと親に叱られますけど、企業も株主に叱られるんですか？」

教員：「企業だと社長が叱られたり、クビになったりするね。ほかには？」

学生：「成績が良いと推薦で大学に入れます。あと就職するときも有利だと思います」

教員：「そうだね。大学とか企業が、その学生にどれくらい能力があるかを判断するために利用するってことだね。企業の決算書も、投資



家が投資先を選んだり，学生が就職先を選んだりすることにも使われるよ」

学生：「成績表も決算書も使い道はいろいろなんですね」

教員：「そう。両方とも成績に関する情報だけど，それをどういう目的のために使うかは，本人も含めて，その利用者次第ってことになるかな」

教員：「学者ともなれば，それじゃあまりに身も蓋^{ふた}もないってことになるけど，初学者のうちはそれでOK。あ，ついでにいいことを教えよう」

学生：「いいことがあるんですか？」

教員：「う～ん，別にいいことでもないけど。学校の成績表って，ホントは嫌いでしょ」

学生：「好きじゃないですね。学校の成績でその人の本当の価値がわかるとは思えないし。ほら，先生によって『えこひいき』とかあるじゃないですか」（しまった！）

教員：「そうそう。個人の主観で評価が変わるという面も決算書にはある。それから，学校の成績表と同じように，決算書だけでは企業のすべてを測ることはできないと覚えておこう（⇒第9章，第11章）。決算書は企業がお金をどう動かしているかというところに注目している。だから，たとえば地球環境の保全や働く人々の幸せにどれだけ貢献しているかなんていう，お金では測れないようなことには無力なんだ」

学生：「会計を勉強しても，企業のことがすべてわかるわけじゃないんですね」

教員：「その通り。それから，成績というのは過去の記録でしかないということも忘れないようにしましょう。それでいて，学校の成績表にせよ，企業の決算書にせよ，将来を判断するために利用

されることが多い」

学生：「これまでのことは変えられませんからね。大切なのはこれからどうするかを決めることで、それを決めるために、これまでの成績を知る必要があるんですね」

教員：「いきなり『そもそも会計とは何ぞや』って話になると難しい感じがするけど、学校の成績表という身近なものとかかなりの部分が共通するってことを覚えておこう。そうすれば、少しは会計にとつきやすくなる」

教員：「もちろん、学校の成績表には出てこないけど、企業の決算書には出てくる話も少なくはない。それについては、これからゆっくり話をしていこう」

ベーシック

1 会計の中心は企業の成績を表す決算書

この本は、会計をはじめて学ぼうとする人たちのために書かれています。しかし、「会計」という言葉にはいろいろな意味があります。たとえば、飲み屋で「会計」と言ったら、飲食代を支払うことを意味します。あるいは、国の「会計」と言えば、国庫に入ってくるお金の額と内訳、それから国庫から出ていくお金の額と内訳という話になります。いずれも、会計がお金に関係しているのは間違いないので、「会計の専門家」などと言うと、お金を扱うこと全般に精通しているといったイメージを持たれがちです。

しかし、大学で学ぶ「会計」は、主として企業会計、すなわち企

業のなかで行われる会計です。さらに、企業会計と言っても範囲が広いのですが、そのうちの決算書について学ぶことが中心になります。もちろん、決算書についてだけを学んでも、会計をすべて理解したことにはならないのですが、まずは目玉になるところから勉強を始めて、徐々に裾野を広げていけばいいと思います。

そこで、決算書なのですが、先ほどのハイライトにあったように、「企業の経営状況を表す成績表だ」とまずは考えてください。もちろん、それだけでは抽象的すぎるので、実際の決算書を見たほうが具体的なイメージは得やすいと思います。例として、日本を代表する企業の1つである「日産自動車」の決算書を付録として巻末(319頁)に付けましたので、そちらを眺めてみてください。それを見ると、2種類の表があるのに気づくと思います。実は、決算書には、いくつか種類があります。その中心となるのは「損益計算書」と「貸借対照表」とよばれる表なので、その2つを載せておきました。損益計算書は1年間で企業がどれくらい儲けたのかを示しています。貸借対照表は企業に資産や負債がいくら残っているかを示しています。これら以外に、決算書にはキャッシュフロー計算書や株主資本等変動計算書などがあります。

何種類かある決算書には、企業の成績に関係するさまざまな数値が収められています。そのなかでも、とくに重要と一般に考えられているのが、損益計算書に載っている「当期純利益」です。当期純利益を含め、決算書に出てくる数値の意味、読み方については、章を改めて説明しますので、いまの段階でとくに覚えておかなければならないことはありません(⇒第9章)。

2 決算書がつくられる目的

決算書との初顔合わせは済みました。ぱっと見では、なんとなく複雑に思える決算書ですが、次に、このようなものがなぜ必要なのかについて説明します。会計専門家による難しい議論はいろいろあるのですが、初学者にとっては、成績表一般の目的から決算書の目的を推測するのがよいと思われます。たとえば、学校の成績表を考えてみればわかるように、成績表にはいろいろな利用の仕方があります。成績表に載っている情報をどう利用するかについては、こうでなくてはならないという決まりは、もちろんありません。会計が扱う決算書についても、それは変わりません。あくまでも、例としてですが、学校の「成績表の使い道」を以下に掲げておきました。これらは、企業の「決算書の使い道」でもあるのです。さらに、あなたが思いついた成績表の使い道があれば、それも書き加えてみてください。

成績表の使い道

- 本人が今後の行動を決める判断材料とするため。
 - 応援してくれている人の信頼を得るため。
 - 何らかの資格を得るための条件として。
 - 他者と比較され、選抜されるため。
 - とくに決まった使い道がなくても、成績を知りたがるのは人間の本能だから。
- (あなたの考えは？)

3 法律による決算書の利用

もっとも、「決算書は企業の成績表として各自で好きに使ってください」というだけでは、あまりに漠然^{ぼくぜん}としているのは否めません。会計は好きにやればよいというものではなく、決められた手続きに従って、好むと好まざるとにかかわらず、肅々^{しゅくしゅく}とやらなければならないものだというイメージを持っている人も多いでしょう。そのイメージは、「制度会計」とよばれるものに相当程度当てはまります。制度会計は、大雑把に言うと、特定の法律が、その目的を遂行するための手段として企業に強制する会計のことです（⇒第2章）。

一番わかりやすいのは「税法」です。税法には公平な課税をするという目的があります。その目的を遂行するために、現行の税法は基本的に、企業に対し、儲けに応じて税を徴収するという考え方を採用しています。企業がどれくらい儲けたかを把握するためには、成績表である決算書を利用するのが便利です。そこで、税法は課税という目的のために、決算書の作成を企業に強制しているのです。

また、「金融商品取引法」（金商法。以前は証券取引法）とよばれる法律は、企業の株式や債券を売買しようとする投資家たちの参考になるように、企業に情報を公表させています。この法律でも、投資家に重要な企業情報を伝えるという目的のために、決算書が利用されてきました。さらに、「会社法」は、株主に雇われた経営者が会社をうまく経営するという責任をどれだけきちんと果たしているかをはっきりさせるために、株主に対する決算書の報告を経営者に要求しています。そのほか、監督官庁が企業に行政上の指導を与えるための資料となるように、決算書の作成・提出を義務づけている法

律がいくつかあります。

こうした制度会計については、第2章で改めて詳しく取り上げますが、ここでは、会計の目的がそれぞれの法律ごとに特定されていることを強調したいと思います。もっとも、大学で学ぶような会計の発展に最も寄与してきたのが、金融商品取引法であることから、「金融商品取引法における目的＝会計の目的」として説明されることもあります。これはかなり狭い捉え方ですが、会計の目的についての代表的な考え方でもあります。

ただし、金融商品取引法といった法律が世界に存在しなかった昔の時代から会計自体は存在していました。たとえば、イタリアのルカ・パチオリという人は、ルネサンス時代に会計の仕方を体系的に説明した本を書いたし、日本でも江戸時代に商家では大福帳^{だいふくちょう}という会計が行われていました。つまり、法律による会計が会計のすべてではないということを覚えておいてください。

4 会計の目的に関する代表的な理論

いったい会計の目的は何なのか。会計はどんな役に立っているのか。それは各自が好きなように考えればいい、というのでは何の説明にもなっていないのではないかと思う人も多いかもしれません。そこで、多くの会計研究者がこの疑問について考察してきました。そして、その考察の1つとして、会計のさまざまな用途から、会計の目的は以下の2つに整理することができるだろうという理屈ないし理論が考え出されました。この理屈によれば、2つの目的を同時に達成するのは難しいので、どちらを重視するかによって、会計（決算書）の中身が変わってくるはずだともしばしば主張されま

す。

① 情報提供目的 会計情報は企業の将来を予測するための資料として利用されるという考え方です。ある企業に投資するのもしないの、あるいは就職するのもしないの、その企業がこれからどうなっていくかに関係しています。会計情報そのものは過去の成績でしかありませんが、それはできるだけ将来予測に役立つような方法で記録されなくてはならないという考え方になります。

② 利害調整目的 実績にもとづいて行われる儲けの分配などの資料として会計情報が利用されるという考え方です。たとえば、企業が今年支払わなければならない税金（法人税）は今年稼いだ儲けによって決まります。そのために、稼いだ儲けがいくらなのか、金額を計算して確定する必要があります。そのとき、納税企業もしくは税務署のいずれか一方にとって都合のいい方法で計算がされていたら、他方は納得しないでしょう。したがって、このような局面で用いられる会計は、過去の成績を多様な利害関係者が納得できる方法で記録されたものであることが重要になってきます。

もっとも、ここまでの話は会計固有の議論というわけでもなさそうです。たとえば、野球選手の成績についても似たような話はできます。すなわち、今年の成績は、来年以降に期待される活躍ぶりを予測するための基礎的な情報になります。そこでの予測にもとづいて、来年の年俵、あるいは移籍する選手であれば移籍金などが決定されるわけです。他方、出来高制で雇われている選手は、今年の成績によって今年の報酬が確定するわけです。このように、一般に成績に関する情報には、将来を予想するための基礎として用いられる

面と、実績を数字として確定させるために用いられる面とがあると言えます。そして、ワンセットの成績情報を異なる複数の用途に役立てようとするれば、一方にはよくても、他方には具合が悪いといった問題も起きます。そうした点については、より上級の文献をトランジットに挙げておきましたので、そちらを参照してください。

繰り返しになりますが、ここで述べたのとは異なる理屈（理論）も多く存在します。たとえば、富士山を八ヶ岳側から見ると、太平洋側から見るとでは、形が違って見えます。富士山も、会計も見る角度が変われば、説明の仕方も変わってくるというわけです。

サマリー

- ☐ 会計の目的は企業の成績表である決算書の作成にある。
- ☐ 決算書にはいくつか種類があるが、中心は損益計算書と貸借対照表である。
- ☐ 決算書を作成する目的は、成績表一般を作成する目的からいろいろ推測できる。
- ☐ 法律は特定の目的を達成するために決算書を利用することがある。
- ☐ 決算書の一般的な目的は、情報提供目的と利害調整目的とに集約できる、と会計研究者によって主張されることがある。



トランジット

会計もしくは財務会計について、ある程度詳しく解説しているテキストであれば、最初のほうに、会計の目的もしくは会計の機能について、学術的な考え方が概説されています。たとえば、①、②を参照してみてください。



① 斎藤静樹 [2014] 『企業会計入門——考えて学ぶ』 有斐閣、第 1

章。

② 伊藤邦雄 [2014]『新・現代会計入門』日本経済新聞出版社、第2章。

③ 広瀬義州 [2014]『財務会計（第12版）』中央経済社、第1章。

企業の決算書のつくり方を定めたルールは「会計基準」とよばれています。多くの会計専門家は、会計の基礎となる考え方が明確でないと、会計基準はうまくつくれないと考えています。その基礎となる考え方のなかには、「会計の目的は何なのか」という話が含まれています。初心者にはちょっと難しい、哲学っぽい話になりますが、会計について深く勉強しようと思うなら、知っておいたほうがよいでしょう。④の文献を参照してみてください。

④ 斎藤静樹編著 [2007]『詳解「討議資料・財務会計の概念フレームワーク」(第2版)』中央経済社、第2部第1章。

利害関係者を納得させるという観点から、会計の目的について論じているのが、⑤です。考えてみれば、たとえば、学園祭が終わった後に運営委員から学生・生徒に向けて会計報告があるのも、みんなから集めた学園祭運営資金が正しく使われていたことを納得してもらうための儀式だと思えることができます。特段、法律に強制されてやっているわけではない、このような会計報告には、会計本来の特質が反映されていると考えることもできるでしょう。

⑤ 友岡賛 [1996]『歴史にふれる会計学』有斐閣アルマ、第1章。

● アルファベット

ASBJ → 企業会計基準委員会
 CVP 分析 176
 EDINET 15, 23, 185
 FASB → 財務会計基準審議会
 FASF → 財務会計基準機構
 IAS → 国際会計基準
 IASB → 国際会計基準審議会
 IFRS → 国際財務報告基準
 IOSCO → 証券監督者国際機構
 IR 情報 185
 NTT ドコモ 208
 PBR (株価純資産倍率) 204
 PER (株価収益率) 204
 ROA (総資産利益率) 182, 195
 ROE (自己資本利益率) 192
 — の分解 192, 193
 SEC → 証券取引委員会
 SPE (特別目的事業体) 226, 232
 Yahoo! ファイナンス 186

● あ 行

後入先出法 133, 134, 136
 アニュアルレポート 186
 あらた監査法人 275
 粗利益 187
 安全性分析 200
 安全余裕度 176
 イオン 190, 209
 意見不表明 281

イベント・スタディ 256, 266
 インカム・ゲイン 254
 受取配当金 188
 受取利息 188
 売 上 88, 90
 売上原価 90, 135, 187
 売上債権 198, 218
 売上債権回収平均日数 198, 199
 売上総利益 187
 売上総利益率 197
 売上高 135, 187
 売上高営業利益率 190
 売上高当期純利益率 192
 売掛金 64
 営業外収益 188
 営業外費用 188
 営業利益 174, 188
 益 金 30
 エージェンシー・コスト 285
 エージェンシー問題 285
 エージェンシー理論 284
 エージェント 284
 エンロン (事件) 225, 230, 233,
 247, 270
 大阪商船三井船舶 62
 親会社概念 248
 オリンパス 24

● か 行

開業費 108, 112
 会 計 2, 19

—の目的 9
 会計基準 12, 18, 21, 24, 209, 210
 会計規制 21
 会計史研究 293
 会計情報 10, 251, 261
 —の有用性 256, 257
 会計制度 18, 22
 解散価値 205
 会社法 8, 22, 25
 回収 63, 64
 回収基準 75
 格付機関 203
 貸方 82
 貸倒引当金 154
 課税所得 30
 割賦販売 75
 合併 248
 合併会計 248
 カネボウ 270
 —の粉飾決算 271
 株価 14, 252, 254, 262
 株価収益率 →PER
 株価純資産倍率 →PBR
 株式 262
 株式会社 13, 20
 株式公開 15
 株主 20, 26
 —と債権者の立場の違い 26
 株主資本等変動計算書 6, 297
 株主総会 13, 231
 借入金 113
 借方 82
 環境会計 288
 環境会計ガイドライン 290
 環境コミュニケーション 291

監査 15, 24, 269, 277
 —の目的 280
 監査難民 277
 監査法人トーマツ 275
 勘定 83
 間接法 217, 218
 管理会計 126
 企業会計基準委員会 (ASBJ) 32
 企業会計原則 304, 307
 —制定の目的 305
 企業結合 248
 企業結合会計 248
 企業集団 223
 議決権 231
 期首 79
 期末 79
 逆基準性 31
 逆粉飾 279
 キャッシュフロー
 営業活動による — 217, 218
 財務活動による — 217, 218
 投資活動による — 217, 218
 キャッシュフロー計算書 6, 217
 三越伊勢丹の — 219
 キャピタル・ゲイン 254
 共通費 239
 金融商品取引法 8, 15, 22, 23
 金融投資 115
 —の資産 116, 121, 118
 繰越商品 135
 クロスセクション分析 190
 経営者 19
 経過勘定 94
 経済的単一概念 248
 計算書類 26

経常利益 181, 188
 決算書 2, 6, 17, 20, 39
 決算書分析 180
 決算整理 96
 決算短信 186
 決算日 → 期末
 欠損てん補責任 28
 原 価 124, 126
 原価計算 123, 124
 減価償却 48, 51, 70, 93, 140, 147,
 218, 306
 減価償却積立金 297
 減価償却費 93, 140, 144, 146
 原価評価 303, 305, 306
 原価法 139
 現金主義 68
 減損会計 117, 147, 148
 限定付適正意見 281
 航海完了基準 59, 62
 航海日割基準 59, 62
 工事完成基準 75
 工事進行基準 75
 公正価値 110
 公認会計士 15, 269
 国際会計基準 (IAS) 33
 国際会計基準審議会 (IASB) 33
 国際財務報告基準 (IFRS) 33
 固定資産償却費 302
 固定費 174
 固定比率 201
 個別決算書 224
 個別法 134
 コンバージェンス 35

● さ 行

債権者 26
 在 庫 198
 在庫回転率 198
 在庫保有平均日数 198, 199
 財務会計 126
 財務会計基準機構 (FASF) 32
 財務会計基準審議会 33
 財務諸表監査 269, 277
 財務制限条項 260
 債務超過 273
 財務報告の目的 254
 先入先出法 133, 136
 残存価額 141
 残 高 91
 残高試算表 91
 修正記入後—— 98
 残余財産 27
 仕入債務 218
 時 価 49, 51, 75, 110, 114, 116,
 134
 時価総額 103, 104, 182, 303, 305,
 306
 時価法 139
 事業投資 115
 ——の資産 116, 117, 120
 時系列分析 189
 自己資本比率 200, 201, 203
 自己資本利益率 → ROE
 試 査 281
 資 産 107, 108
 ——の測定 45
 ——の定義 112
 ——の範囲 109

—の評価 110, 114
 —の部 80
 自社株買い 166
 自社株の売却 162, 167
 資生堂 206
 実現基準 119, 120
 実現主義 68
 シナジー 240
 支払利息 188
 資本 81, 105, 159
 —と利益の区別 159, 160, 163, 171
 資本会計 159
 資本金 81
 資本取引 161, 163, 165
 締め切り 91
 収 益 86
 収益性分析 192
 出港基準 59
 取得原価 110, 114, 117, 119, 121, 132
 循環取引 272
 純資産 81, 105, 159
 —の部 81
 純粋持株会社 234
 純損失 87
 純利益 87
 使用価値 110, 114, 116, 117
 償却性資産 140
 償却費 301
 証券化 232
 証券監督者国際機構 (IOSCO) 33
 証券市場 14
 証券取引委員会 (SEC) 33, 227
 証券取引法 15

上 場 15
 少数株主 →非支配株主
 情報の非対称性 285
 除却費用 52, 53
 仕 訳 83
 新日鐵住金 262
 新株の発行 162
 新株予約権 168, 170
 —の発行 170
 新日本監査法人 275
 ストック・オプション 165
 スプレッド 195
 税金等調整前当期純利益 188, 217
 精 査 281
 生産高比例法 142, 144
 制度会計 8
 製品保証引当金 150
 製品保証引当金繰入額 150
 税 法 8, 29
 セグメンテーション 238
 セグメント情報 224, 237
 ソフトバンクの— 237
 セブン&アイ・ホールディングス 224
 宣言型の財務諸表体系 294
 総資産 181
 総資産回転率 193, 198, 199
 総レバレッジ 193, 201
 租税公平主義 29
 租税法 8, 29
 租税法律主義 29
 ソニー 210
 その他の包括利益 105
 その他有価証券 102
 ソフトバンク 210, 233

損益計算書 6, 45, 79, 98, 186
 損益分岐点 175
 損 金 30
 ●た 行
 対 応 70
 貸借一致の原則 85, 92
 貸借対照表 6, 45, 79, 80, 98
 貸借対照表価額 141, 144
 退職給付に係る負債 154
 退職給付引当金 153
 大日本人造肥料 301
 大福帳 9
 耐用年数 141
 多角化 209
 武田薬品工業 252
 棚卸資産 218
 担税力 29
 単独決算書 224
 中央青山監査法人 270, 273, 275
 長期請負工事 52
 直接法 217
 積切出帆基準 59
 低価基準 137
 定額法 141, 144, 146
 低価法 137, 138
 提示型の財務諸表体系 294
 ディスクロージャー制度 15, 23
 デュープロセス 34
 定率法 141, 142, 144, 146
 ——の償却率 141
 転 記 90
 当期純利益 6, 97, 98, 101, 104,
 188
 当期未処分利益 294

東京証券取引所 16
 東京人造肥料 298
 東京電力 208
 投 資 63, 64
 東 芝 270
 動態的諸原則 305, 307
 特別損失 188
 特別目的事業体 →SPE
 特別利益 188
 トヨタ自動車 58, 206
 ●な 行
 内部統制 283
 内部統制監査 284
 内部統制報告書 24
 内部留保 81
 ナナボシ 275
 二重責任の原則 279
 日興コーディアルグループ 276
 日産化学工業 298
 日産自動車 13
 日本長期信用銀行 275
 日本郵船 60, 62, 296
 乗っ取り 14
 のれん 240, 242
 買入—— 244
 全部—— 244
 ●は 行
 買 収 229
 配 当 25, 26, 166
 配当規制 28
 配当宣言財務諸表 296
 配 分 44, 46, 47, 50
 発生主義 68

払込資本 172
 バリュース・レリバンス・スタディ
 258
 販売費及び一般管理費 187
 引当金 149, 154
 —の取り崩し 151
 非支配株主 243
 非支配株主持分 243
 非償却性資産 140
 費用 46, 47, 86
 評価益 120
 評価勘定 154
 評価損 49, 120
 評価の問題 45
 費用収益対応の原則 70
 比率分析 190, 191, 202
 ファーストリテイリング 208
 不確実性 255, 264
 複式簿記 80, 82, 98
 負債 81, 107, 110
 —の定義 113
 —の部 80
 不適正意見 281
 プライベート・ブランド 198
 ブランド使用料 236
 プリンシパル 284
 粉飾 269, 279
 平均法 134
 変動費 174
 ポイント引当金 152
 包括利益 101, 104
 法人税 29
 法人税法 22, 30
 簿価 141
 保守主義 139

●ま 行

前受収益 95
 前払費用 94
 未収収益 95
 みずす監査法人 275, 276
 三田工業 28
 三越伊勢丹 180, 185, 209
 三菱商事 208
 未払費用 95
 無限定適正意見 280
 持合株式 102
 持分法 232

●や 行

有価証券 48
 有価証券届出書 23
 有価証券売却益 49
 有価証券報告書 15, 23, 24, 185
 有形固定資産回転率 198, 199
 輸送運行基準 62
 ユナイテッドアローズ 180, 190,
 209

●ら 行

ライブドア 160, 163, 270
 利益 41, 57, 68, 86, 135
 決算書の— 252, 254
 利益剰余金 81
 利子補給制度 61
 リスク 255, 264
 リース資産 109
 リストラ引当金 153
 流動比率 201, 202
 留保利益 172

ルカ・パチオリ 9
 レバレッジ 195
 連結決算書 224, 229, 237
 ——の作成ステップ 230

——の範囲 231, 232
 ●わ 行
 割引現在価値 263, 264

はじめて出会う会計学〔新版〕

A First Course in Accounting, New edition

ARMA



有斐閣アルマ

2009年4月25日 初版第1刷発行

2015年9月25日 新版第1刷発行

著 者

かわ
川
の
野
かつ
勝
やま
山
あら
荒

もと
本
ぐち
口
お
尾
だ
田
た
田

まさ
昌
ゆう
裕
じゅん
純
えい
映

じゅん
淳
よし
良
こ
子
べい
平
こ
子

発 行 者

江

草

貞

治

発 行 所

株式
会社

有

斐

閣

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町 2-17

電話 (03) 3264-1315〔編集〕

(03) 3265-6811〔営業〕

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・大日本法令印刷株式会社／製本・大口製本印刷株式会社
©2015, Y. Kawamoto, M. Noguchi, Y. Katsuo, J. Yamada, E. Arata.
Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-22061-4



本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。